
俺と死神の共同生活

真神界理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と死神の共同生活

【Nコード】

N6503X

【作者名】

真神界理

【あらすじ】

主人公、霊崎雄介は昔から、幽霊や妖怪などの人ならざる者が見えた。そして今回、雄介は学校一のお嬢様、夕月絵美に憑いている死神を見てしまう。雄介はこの先、どうなってしまうのだろうか？

俺には死神が見える（前書き）

不定期ですが、頑張っ て更新していきたいと思います。

俺には死神が見える

昔から、変なものを見た。

それはたとえば、幽霊や妖怪といわれる、人ならざる者達だ。

まあ、それはいいとして。

俺、れいさきゆうすけ霊崎雄介は、なぐさひろが桜坂学園に通う二年生だ。

桜ももうそろそろ散り終わろうかという四月中旬、新しいクラスにも慣れはじめたころ、俺は『それ』を見た。

いつものように教室に入り、席に座る。

「よお、雄介」

「おはよう、弘」

話しかけてきたのは^{おおやまひろし}大山弘。

一年のときからの友人でいかにもスポーツマンという体をしている。

「おい、見るよ。^{ゆづりけいみ}夕月絵美だぜ。」

「今日も美人だなあ」 夕月絵美。薄紫の長い髪が印象的な、学園一のお嬢様で美少女だ。

ファンクラブもあるらしい。

俺は弘につられ、そちらを見る。

そこには、いつものように取り巻きにかこまれている夕月の姿があった。

だが、俺はそれよりも、夕月の上にいるものを見て絶句した。

そこには、死神がいた（ ）。

『それ』は、夕月の上に漂い、白く輝く大鎌をだらんとぶら下げ、漆黒のローブを身に纏ってそこにいた。

いやいや、死神？

まったく何を言ってるんだろうなあ、俺は？

死神とか、週間少年ジャンプでやってる某漫画だけで充分だって
そう思い、もう一度見る。そこには、やっぱり夕月の上を漂っ
ている死神がいた。

ふう、認めようじゃないか。

確かに俺にはあの死神が見える。

昔から幽霊やら、妖怪やらが見えた。

あらためて考えてみると、某少年漫画の主人公の設定に似ている
気がする。

まあそれは置いて、どうしよう？

あの夕月の上にいる死神は、俺に気付いていないようだ。

死神。人を死に誘^{いざな}う神。

俺の中の死神のイメージはこれだ。

断じて刀を持って戦ったり、名前を書くと死ぬノートなんて持っ
ていない。

そして、俺のイメージ通りなら、近いうちに夕月は死ぬ（……）。
どうするも何も、普通に考えれば関わるべきじゃない。世の中
には、別に死神に憑かれていなくても死ぬ人間なんていくらでもい
る。

加えて、俺と夕月は友達でもなんでもない。ただのクラスメイト
だ。

だから、俺が助ける必要なんてどこにもないし、助けようとして
死神に殺されるなんて本末転倒だ。

けれど、俺は本当にそれでいいのだろうか？

もし、夕月が今日、今日でなくても明日や明後日に死んだと聞い
て、俺は何も感じないのだろうか？

俺は、夕月を見殺しにしようとしているのではないか？

そんな考えが頭の中をグルグルまわっていると弘に

「どうした雄介？ 夕月さんのほうをじっと見て？」

まさか、惚れたのか？」と言われた。

「別に、そんなんじゃないさ」 そう言って俺は、夕月から、正確には夕月の上にいる死神から視線をはずす。

「そうだよな。お前ってなぜかそういう恋愛系の話に一切興味を示さないよな」

弘が何か言っているが、それを無視して俺は黒板のほうを向く。
さて、これからどうしよう？

放課後。俺は校舎裏に来ていた。

あれからいろいろ考えて、とりあえず夕月に憑いている死神についての話を訊こうと考えた。

だが、ここで大きな問題にぶつかった。

それは、同じクラスになったにも関わらず、俺は夕月と一度も話したことがないのだ。

考えてもみてほしい。 クラスで一度も話したことのない男子に『君に憑いている死神について話したいんだけど？』と言われたらどうだろう？

俺ならコイツ頭湧いてんじゃないのか？ と思う。

夕月なら悲鳴をあげて逃げるかもしれない。

そして、俺が夕月に対してやろうとしていることはそういうことだ。

うん、なんで自分でもこんなことをやろうとしているのかと一瞬思ったが、やらなければいけないだろう。

俺のためにも、夕月のためにも。

今日は授業に全然身が入らなかった。 いや、だって俺が先生の話聴こうとするといやでも死神の姿が眼に入るんだぜ？

そりゃ授業に集中できねえよ。

そのせいで何度か先生に注意された。 ちなみに俺が窓側端っこ後方の席で、夕月が真ん中らへんの席だ。 そんなことをつらつら

と考えていると、

「お待たせしました」

という声がした。

そこには、夕月絵美がいた。

何故ここに夕月がいるのかといえば、俺が夕月の下駄箱に手紙を入れて呼び出したからだ。

さっきも言ったが、夕月は学校一のお嬢様だ。

それに対して、俺は変なものが見えることを除けばただの一般生徒だ。

同じクラスだということ以外に、接点なんてどこにもない。

周りに邪魔されず話をしようと思えば、必然的にこうするしかなかった。

「それで、お話って何ですか？ 霊崎さん」

「ああ、というか、覚えてたんだな。俺の名前」

「同じクラスメイトなんですから、当然です」 そう言って、夕月は笑った。

その笑顔は魅力的で、人気が出るのも分かる気がした。

もっとも、俺には夕月の上で漂っている死神のせいで、そんなものを感じる余裕はなかったが。

「どうかしましたか、霊崎さん？」

何も言わない俺を不審に思ったのか、夕月から話しかけてきた。

「いや、何でもない。ところで夕月。実は俺、お前に相談があるんだ」

俺がそう言うと、夕月は驚いたような顔をした。

まるで予想が外れたみたいだ。

まあ、確かにこの状況は誰がどうみたって告白をしようとする場面だしな。

「もしかして、俺が夕月に告白すると思ったか？」俺がそう言うと夕月は

「い、いえ、別にそんなことはありません！」

と頬をあからめながら否定した。

「そっか。それで夕月、相談なんだけどな、俺には最近、気になる子ができたんだ」

夕月だけどな。死神に憑かれてる女の子がいたら、誰でも気になる。

「その子は、夕月と同じお金持ちのお嬢様なんだ。それで……」

「あの、すいません、霊崎さん」

話の途中で夕月に遮られた。

その顔は少し怒っているようにも見える。

「何だ？」

「もしかして、私がお金持ちだから相談したんですか？ それなら別に、私以外にもお金持ちの人はこの学校にはたくさんいます。」

確かにこの学校は名門校だとかで、夕月ほどではないにしても、お金持ちの子供はいっぱいいる。

「もしそうなら、他の人をあたってください。」

私、これでも忙しいんです」

俺はそう言ってこの場を去ろうとする夕月の両肩に両手をかけ、引き止める。

「待ってくれ！ 夕月じゃなきゃ駄目なんだ！ 夕月以外の人じゃ、何の意味もないんだ！」

そっだ、夕月以外の人じゃ何の意味もない。

実際死神に憑かれてるのは夕月だし。

思いが通じたのか、夕月は顔を少し染めて

「わ、わかりました。もう少しだけなら、お話を聞いてあげます」
そう言ってそっぽを向いた。

「ありがとう、夕月」

俺は笑顔で夕月の肩から手を降ろした。

「それで、その子は夕月と同じお金持ちなんだ。ただ、その子は少し変わってて、オカルトにどっぷりはまってるんだ」

「オカルトですか……。ところでその子って、この学校の人ですか

？ お名前は？」

え、どうしよう。そこらへんは全然考えてなかった。

ただ夕月から死神についての話だけを聞くつもりだったし。

「いや、うちの学校の子じゃない。名前は……シエ、シエリスって
いうんだ」

シエリスって誰だよ。何で外国人の名前にしたんだ俺？

そのとき、今まで何の反応も示さなかった死神がピクリと動いた
気がした。

なんだ……？

「シエリスさんですか……。いいお名前ですね。それで、そのシエ
リスさんがどうかしたんですか？」「あ、ああ、それでそのシエリ
スが、突然妙なことを言いだしたんだ」

「妙なこと……？」

さあ、ここからが本題だ。

「ああ、『私は死神に憑かれている』ってな。

なあ夕月。お金持ち連中の中で、同じようなことを言っている奴
っているか？」

「いえ、そんなことを言っている人は私の知る限り一人もいません
けど？」

あれ、わりと普通の反応だ。動揺も全然してないみたいだし。

俺が夕月の反応に少し困惑していると

「あの、霊崎さん。一つ聞きたいことがあるんですけど、いいです
か？」

と夕月が聞いてきた。

「別にいいけど……」 なんだ？

「どうして、そのシエリスさんのことをそんなに気にするんですか
？ 私から言わせれば、その子は明らかにおかしいです。死神に憑
かれているだなんて……。」

いや、本当に死神に憑かれているのはお前だけだな？

だいたいシエリスって架空の人物だし。

ただ、この質問には答えねばならない。

シェリス（架空の人物）と夕月は、死神に憑かれていますって点では同じだし。「どうしてって言われてもな……。正直なところ俺にも分からない。」

ただ、死神に憑かれていますだなんて言うくらいなことから、何か悩みがあると思ったんだ」

「悩み、ですか……」

「ああ、お金持ちの家に生まれるってことは、俺みたいな庶民じゃ考えられないような、重い悩みがあるってことだと思うんだ。」

全員が全員そうじゃないと思うけど、そのせいで、死にたくなるようなこともあると思う。

だから、もしも俺がその助けになるなら、それはすごくいいことだと思うんだ」

本当の俺はそんな善人じゃないけど、それでも、誰かが死ぬかもしれないのを黙って見てられるほど、神経が図太いわけでもない。だからこうして、ここにいるわけだし。まあ、シェリス（架空の人物）には後で謝っておこう。

俺のせいで夕月におかしな子扱いされちゃってるし。俺がそんなことを考えていると、夕月がなぜかキラキラと瞳を輝かせてこう言った。

「靈崎さんって優しい人なんですネ。私、少し誤解してました。」

靈崎さんって大山さんぐらいとしか話さないし、クラスからも浮いてて、もっと冷たい感じの人だと思ってました」

なにげに失礼だな。このお嬢様。

というか、俺はクラスから浮いてるのか。

しかも、弘ぐらいとしか話さないって。

ん、でもよくよく考えてみたら俺、この学校に入学してから弘以外に友達がいらないような気がする。

あれ、俺ってもしかして、もしかしくなくても友達が少ない？

いや、これ少ないってレベルじゃないぞ。そうか……。俺って弘

しか友達がいないのか……。

今度から、もっと弘の誘いに快く返事しよう。

部活の応援にも、できるかぎり行くことにしよう。

うん、そうしよう。

俺がそんなふうに、今ここにいないたった一人の友達を大切にしようと思っていると、俺に俺の交友関係が弘ぐらいしかいないと教えてくれたお嬢様は、さらにこんなことを言った。

「でも、霊崎さんはシェリスさんのために、こんなに一生懸命になつてるんですね。私に相談までして……。」

と、ここまでキラキラ輝いていた瞳を急に真剣なもの変えて、夕月は言った。

「もしかして、その、霊崎さんって、シェリスさんのことが好きなんですか？　気になるって言ってたし」

好きも何も、シェリスって架空の人物だから、答えようがない。

でも、この純粹培養のお嬢様は、生半可な返答じゃ納得してくれないんだろうなあ……。

「別に好きってわけじゃないよ。ただ……。」

「ただ？」

ここで思い出されるのは、初恋の女の子。

俺が助けることができなかった、女の子。

好きだった。

自分でもバカなんじゃないかと思うくらい。

おかしいんじゃないかと思うくらい。

もっとも、その恋は俺が彼女と出会った瞬間から、すでに終わっていたけど。

始まりと終わりが一緒だった。

俺が助けるも何も、彼女は終わっていたわけだし。

俺が助ける前に。俺と出会う前に。

だから正確には、俺には助ける助けがないの選択肢なんて与えられてなかった。

助けられなかった結果が、彼女だった。

それでも俺は助けたかった。

無理だと分かっていたけれど。

無駄だと分かっていたけれど。

だから俺は、夕月にこう答える。

「ただ、嫌だったんだ。何もできない自分が。 あいつを助けることができなかった自分が。 だから、もしかしたら大きなお世話かもしれないけど、助けようと思ったんだ（夕月を）」

俺は夕月の瞳を見据えて、胸を張って言った。

すると夕月は、目を見開いた後、俺に背中を向けた。

なんだろう？

「そ、そうなんですか。それと、すいません。 迎えの車を待たせているので、私はこのあたりで……」

時計を見ると、結構な時間が経っていた。

「ああ、そうだな。今日は悪かったな。 急に呼び出したりして」

「いえ、私もたいして相談にのれず、申し訳ありませんでした。

その、頑張ってくださいね。 シェリスさんのこと」

え、なんでここでシェリス（架空の人物）が出てくるんだと一瞬疑問に思ったが、よくよく考えてみれば俺、シェリスについて夕月に相談しにきたっていう設定だったな。

というか、話していて思ったんだが、もしかして夕月は、自分に死神が憑いていることに気付いてないのか？

「なあ、夕月。

帰る前に一つだけ答えてくれないか？」

「なんですか？」

「夕月は、死神っていると思うか？」

「おかしいことを聞きますね、 霊崎さん。 シェリスさんの影響ですか？」

死神なんて、いるわけじゃないじゃないですか」

そう言って、夕月は笑顔で去って行った。

その笑顔は、夕日に照らされてとても綺麗だった。だが、俺がそれ以上に意識を奪われたのは、夕月に憑いていた死神が、いつのまにかいなくなっていたことだ。

帰り道、俺はいつのまにかいなくなっていた死神について考えていた。

夕月と話していたとき、俺はできるだけ死神のほうをみないよう
にしていた。

怖かったから。

それにしたって、いなくなったならすぐに気付くはずだ。

それにどうも釈然としない。死神が夕月から離れた理由がさっぱり分らない。

それに夕月自身、死神に憑かれていることに気付いてないみたい
だったし。

一体どうなってるんだ？

それからいろいろなことを考えて、気付けば、家の前にいた。

「はあ、結局何も分からずじまいか……」

俺はそうつぶやいて、家の中に入った。

そして俺が玄関の鍵を開け、家に入って最初にみたのは、黒い口
ーブに大鎌を持った死神だった。

これは、俺の人生終了のお知らせか……？

死神問答

俺は死神のために料理を作っていた。

いや、なに言っただお前とか、どうしてあの状況からそんな展開になるんだとか、言いたいことは分かる。

けど、現状を説明するにあたって、この言葉が一番分かりやすいんだ。

俺は、家に帰ってからのことを料理を作りながら回想する。

俺の目の前には、夕月に憑いていたものと同じかどうかは分からないが、死神がいた。

すぐにこの場から逃げ出したい衝動に駆られたが、なんとか押さえ込んだ。

逃げ切れるとも思えなかったし、逃げたとしても行くあてなんてどこにもないからだ。

弘の家に逃げる？ 却下。

友達をこんなことに巻き込むわけにはいかない。

俺がどうやってこの状況を切り抜けようかと考えていると、目の前の死神が、

「どうしました？ 具合でも悪いんですか？」

と聞いてきた。

俺の具合が悪いとしたら、その原因はお前だ。

「ところで私、お腹が減ってるんです。ご飯を作ってくれませんか？」

しかもこの死神、具合が悪いかもしれない人間に料理をさせる気が。

ふざけてる。こんな死神の言うことなんか聞く必要ない。

だが、俺の発した言葉は、

「はい、喜んで!」

……別に俺、ヘタレじゃないからな?

回想終了。改めて思い返してみると、情けねえ!

でも、手に大鎌を持ってるんだぜ? 誰だってそんな人物を前にしたら、恐怖するはず。決して俺がヘタレというわけではない。

……なんだろう、自己弁護すればするほど、空しくなってきた。もうこのことについて話すのはやめよう。

料理もできたし。冷蔵庫の中にあるありあわせだけど。

これで、俺が考える時間は終わった。

俺はこれから、キッチンを出てリビングにいる死神と話さなければならぬ。

死神は大鎌を壁にたてかけて椅子に座っていた。

「これ、冷蔵庫の中にあるありあわせですけど……」

そう言っただけは、死神の前に料理を置く。

「ありがとうございます」

死神は、被っていたフードをとって、料理を食べはじめた。

俺は死神の顔を見て驚愕する。

そこには、将来絶世の美女とか呼ばれてもおかしくなさそうな、長い銀髪と紅い眼をした俺と同じ年くらいの少女がいた。

まあ、こんな格好して不法侵入してるくらいだから、嫁の貰い手はあんまりいなさそうだけど。

しばらくして料理を食べおわり、死神は俺に話し掛けてきた。

「やはり、お父上に似ていますね、あなたは」

なぜいきなりここで父さんが出てくるんだろう?

そもそもこの死神、さっきから話に脈絡がなさすぎる。

料理を作れとか。死神のいうとおりにした俺も俺だけど。

しかし、そんなことを言っても仕方がない。

俺もこの死神に聞きたいことがあるんだから。 夕月に憑いてい

た死神のことと、なぜ俺の家にいるのか。

とりあえず、話を合わせる。

「父をご存じなんですか？」

「ええ、あなたのお父上は立派な死神でしたよ」

……………なに？

今、この死神とんでもないことを言つたぞ？

俺の父さんが死神？ いや、ちよつと待つて。

生まれてから十六年、幽霊や妖怪、そういう人ならざる者達の相手をしてきた。

普通の人なら受け入れられないようなことも、受け入れられる自信もある。

だけど、父さんが死神？ そんなことがあるわけ……………あるかもしれない。

俺の父親、れいさきりょうじ霊崎綾時は母さんと一緒に海外で働いている。そういえば、うちの倉庫になぜかバカでかい鎌があつた。

昔一度父さんに、なんでうちにこんなものがあるのかと聞いたことがある。

父さんはそのとき、『これは昔私が使つたものだ』と言つた。

俺はそのとき、何に使うんだよこんなものと思つたものだ。

でも今こうして思い返してみると、なるほどそうか父さんは死神だつたのかー。って全然納得できねえよ。

そういうのは本人からシリアスな雰囲気で聞かなきゃ駄目なんじゃないのか？

なんで俺、俺の人生そのものを根本から覆してしまつかもしれない真実を、こんななんでもない場面で聞いているんだろう？

死神はそんな俺にさらに追い打ちをかけた。

「あなたのお父上は、『矯正の神様』という異名で知られ、多くの悪霊を改心させて天に還しました」

なんだよ『矯正の神様』って！？

駄目だ、これ以上このことについて話を聞くのはダメージが大き

すぎる。

話題を変えよう。

「あの、父の話はもういいです。ところで、なんであなたはこの家に来たんですか？」

「ああ、そうでした。私はそれを話そうと思ってここに来たんです。実は、あの世で事件が起きて、その余波で一部の悪霊が現世に逃げてしまったんです。」

私は、その悪霊達を捕まえるために現世に来たんです」
なるほど。でもそれだけじゃ俺の家にいる理由にならない。

「そうなんですか。それで、なんで俺の家にいるんですか？」

「それはあなたがかなり強い力を持っているからです」

俺が強い力を持っているから？ どういうことだ？

「悪霊達は強い力に惹かれます。そしてその力を食って、自分の力にします。」

私はあなたを守るためにここに来ました」

そう言えば聞こえはいいけど、それって要するに……

「俺をエサにして、悪霊を捕まえようってことですか？」

「そういうことです」

はあ……。俺はまたいつものように厄介ごとに巻き込まれるのか……。

けど、これで一つ疑問が解消した。残る疑問は……と、俺が思考を進めていると、

「雄介さん。私からも質問があります」と、死神から言われた。

質問の前にどうして俺の名前を知っているのか教えてほしい。

「私と雄介さんは、以前どこかでお会いしたことがありますか？」
ない。

「ありませんけど……」

「そうですか……」

死神は、どこか不満そうな顔でそう言った。

なんなんだ？ 質問の意図がいまいちつかめない。「ということ

は、あの言葉は私に向けられたものじゃないんですね……。結構ドキツとしたのに……」

後半は何を言っているのか分からなかったが、察するに、俺この死神はどこかで接点があったようだ。

でもどこで？

「はあ、その顔は本当に気付いてないみたいです。 どうして気付かないんですか？ 私の名前を急に呼んであんなことを言ったくせに！」

あんなこと……？ 急に名前を呼ぶ……？

名前を急に呼ぶに関しては、強烈な心当たりが一つある。

けど、あんなことってなんだ？

というか、この死神の言動をふまえて、俺の予想が正しければ夕月に憑いていたのはこの死神になる。

「もしかして、夕月に憑いていた死神って……」

「夕月？ ああ、私をダシにして近づいたあの可愛い女の子ですね！？ そうですよ！ 夕月さんに憑いてた死神は私ですよ！」

ですよじゃねえよ。

なんで悪霊捕まえに来て夕月に憑いてんだよ。

意味が分からない。

「仕方ないじゃないですか！？ 徹夜明けで寝ようと思ったら、あんなくだらない事件が起きて、その後始末で現世に急いで来たんですから！」

「事件？」

そついや言ってたな、そんなこと。

「はい。閻魔大王様と大鬼神様が今あの世で大ブレイク中のアイドル、ブラック・アイちゃんとホワイト・サキちゃんのどっちが可愛いかで大喧嘩しちゃって……」

くだらねえ！

「なにやってんだ閻魔と鬼神」

「ええ、しかもそのせいで一部の悪霊が逃げちゃったんです」
なるほどね……ん？ でも

「それでなんで夕月に憑くことになるんだ？」 「それは、さすがの私も疲れてて……」

移動するのも億劫になつていると、ちょうど私のような死神が憑いても絶対に死ななそうな生気に満ちた魂があつたので、憑いたんです」

「それが夕月だったってわけか」

「そうです」

ふうん……そういうことか。

「どおりで、夕月に死神の話をして普通の反応しかなかったわけだ」

「あの、そのことなんですけど雄介さん。どうして、夕月さんに話しかけたんですか？

私が言うのもなんですけど、死神に憑いてる人を見たら、普通その人とは関わらないようにしますよね？

どうして、夕月さんと関わろうと思ったんですか？」

「ただの自己満足だよ」 そう、本当に、ただの自己満足だ。

夕月を死なせたくないってのもあつたけど、それ以上に、あいつのときのような惨めな思いをしたくなかっただけだ。

死神はしばらく俺のことを見ていたが、やがて諦めたようにため息をはき、

「わかりました。これ以上このことについて詮索はしません。

では、これからのことを話しましょう」

「これからのこと？」

「私、これからこの家に住むことになってるので、よろしく願いしますね。ああ、綾時さんの許可は取ってますので、ご安心を」

こうして、俺と死神の共同生活は始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6503x/>

俺と死神の共同生活

2011年11月7日03時21分発行